

---

# 息吹を感じて

緑青

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

息吹を感じて

### 【Nコード】

N8103X

### 【作者名】

緑青

### 【あらすじ】

塾帰り、いつも公園で見かける同級生の女子。気になってはいたけれど、話す勇氣はなくて。

同じ塾だったんだ。

ポニーテールを肩にかかるくらいまで伸ばし、私と同じ制服を着る女子が私の通う塾の玄関から出ていく、その背中を見送る。

夏休みが明けて三週間。高校も塾も平常運行に慣れてきた。週に二回、高校が終わったら塾に行くが、その帰りは7時を過ぎる。まだベタつく暑さは残っているが、日はすでに暮れていて薄暗い。

そんな塾の帰り道の途中の公園、必ず見かける人影がある。同級生の女子 さつき出ていった女子だ。これは一学期のときから見てきた光景で、ずっと気になってはいたが、話しかけずにいた。

そして、私は今日も横目で彼女を確認し、家に向かうのだろう、と  
か思っていた。

「あー、もしかして、日高さん帰っちゃったかなあ？」

職員の男性が封筒を手に言った。

「あ、三木さん。」

その職員の人は帰ろうとする私を急いだ様子で手まねいた。

「帰るの？ちよつと渡すものあるんだけど。」

早く帰りたいのはやまやまだが、そんなに急いであるかといえ、そういうわけでもない。私は素直に従った。

「何ですか？」

「これ、次の模試の連絡と、志望校調査が入ってるんだ。」

職員用のカウンターからすでに手に持っていた物と同じ封筒を取りだし、私に渡してきた。『三木彩菜様』と印字されている。

「来週までに出してくれる？」

「……はい、分かりました。」

なるほど。そろそろ現在高一の生徒に営業を本格的にシフトさせる頃か。そして、私のようにまだフワフワしてる生徒に本気を出させよう、と。まあ確かにそろそろ受験勉強を始めなくちゃ、とは思っ

ていたが。大学なんて、まだ何となく”それなりにいいところ”に入りたいくらいにしか決めていない。

封筒を鞆にしまう私に職員の方はさらに続けた。

「あ、日高さんと同じ高校だったよね。」

日高、という人は何となく聞いたことがあるくらいだ。顔までは分からないけど、状況から察するに。

「さっき出ていったひとつ結びの女子ですか？」

「そうそう。これ渡し損ねて、でも日高さんは今日しか授業なくてだから、来週までに一回封筒を取りに来るように言ってくれると嬉しいんだけど。」

まだ喋ったこともないから無理、と言おうと口を開きかけたところで、封筒をチラツと見た。『日高空良』ふうん。そして私は言った。「分かりました。」

「そう、ありがとう！よろしくね。」

職員の方は次の封筒を配るため、その場を後にした。

勢いで言ってしまった……。

帰り道、かなり後悔して歩いていた。まだ話したこともない……というか、名前すらさつき知ったばかり。普段から見かけてるとはいえ、話しかけられるとは思えない。でも、引き受けてしまった以上、伝えることは伝えないと……。

そうこうしているうちに、公園にさしかかった。

中を覗くと。いた。『日高空良』さんが。ベンチに座って上を向いている。

学校でいきなり話しかける勇氣もないし、今なら一対一。下手に友達といるより話しやすいはず。

私は勇氣を振り絞って、公園の中に入った。

「あのおー……。」

相手の様子を伺うように話しかける私に、『日高空良』さんはゆっくりこちらを向いた。

「えっと、日高さん、ですか？ 塾の。」  
緊張している私とは逆に、『日高空良』さんはやわらかく笑って話し始めた。

「うん、そう。」  
私はいくらかホツとした。あとは伝えるべきことを伝えるだけ。

「塾に来週までに提出するプリント、日高さんに渡し忘れたんだって。だから、それまでに一度塾に取りに来てほしいよ。」

よし、これで用事はすんだ。もう帰っても大丈夫。……なんだけど何だか、日高さんの次の言葉を待ってる自分がいる。

「分かった。あ、ねえ、三木さん結構この道通ってない？ 帰り道なの？」

正直、驚いた。気にしてるのは私だけだと思ってた。でも、日高さんの方も私のこと気付いてたなんて。しかも、名前まで知ってるなんて……！

「何で私の名前知ってるの?!」  
驚いて聞き返したが、日高さんは余裕の笑顔のまま表情をくずさない。

「そりゃ、少し注意してれば……高校も塾も同じなら名前くらい分かるでしょ。」

そこまで聞いて何だか恥ずかしくなった。まるで気付いてなかったのが自分だったから。

でも、少し話したただけだが、悪い人じゃなさそうだし、実は何で公園にいるのかも知りたい。いつそ少し寄り道したつもりで、話してみよう、という気になってきた。

「隣、いい?」

「どつぞ。」

ベンチに私がちゃんと座れるよう、日高さんは少し端にずれた。私は隣に座る。

「いつもこの時間に公園にいるんだ。」

日高さんは私が聞く前に話し始めた。

「うん、よく見かける。塾帰りに寄るの？」

「ううん、ほぼ毎日。」

私は驚いて日高さんの方を向いた。

「毎日?!何してるの?」

「えっと……眺めてる、色んなもの。」

日高さんは笑って答えた。

私は辺りを見回した。しかし、そこにあるのは特に変わりばえのない街路樹に遊具、そして住宅街に車の通りの少ない道路。毎日通るだけで飽きてくるくらい何も変わらない風景の何を眺めてるのだろう?

「飽きない?」

私は素直に聞いた。

「うん。よく見ると面白いよ。」

日高さんは周りを見まわしながら言った。

「よく見るとね。例えば、最近は月がよく見えるようになった。そろそろ夏も終わって、星も綺麗に見えるようになるんじゃない?」  
空を見上げてみる。月がハッキリと黄色く光っていた。雲に全くかかっていない満月……じゃない、少し欠けている。日高さんみたいに毎日注意して見ているわけじゃないから、夏休みよりハッキリと見えるのかはわからないけど。

日高さんはまた頭を公園に戻した。私も合わせて公園を見回してみるのが、特に気付くことはない。日高さんの目にはどう映っているのかが気になった。

「空だけだったら、家で見てもいいんじゃない?そろそろ風邪ひきやすくなるし。」  
少し遠回しに聞いてみる。

「公園の方が広く見えるからね。それに、空以外でも……木とか、ここに来る人の服装とか。意外と変化分かりやすいよ。」

「木?」

よく見たがその変化は私には見てとれない。何となく悔しい。

「まだ枯れてはないんだけど……前より緑が少ないというか……少しずつだけど、葉の先っぽとか見ると変色してるよ？」

なるほど。確かに一部黄色くなっているところはある。けれど自分で気付くにはかなり注意しなければいけない。

「秋が来て、冬支度始めてるって、分かるでしょ。」

「へえ……。」

そういう考え方が出来るって、すごい。改めて言われて、見てみるだけで大分違いに気付けるんだから、考え方の違いが行動にでるんだろうな。

「自然は天体に合わせて季節の変化を確信して生きてるんだって思っただけ。だから、私はそれを感じて季節を予感できる。毎日いとも飽きないよ。」

予感……か。

「何か、すごいね。敏感で。」

「そんなことないよ、預言じゃないんだから、一人で感じてるだけだって。誰にでもできるし、みんなも感じてることだと思うよ？」

日高さんは軽く笑いながら言うが、ちゃんとそれを言葉で表せるまで感じる事ができるって、すごいことだと思う。

「季節の変わり目を自然で感じとるなんて、あんまり意識してやったことなかった。カレンダー見れば分かるから。」

素直な感想だ。

「こうしてみるのも楽しいかも。」

いつもの見慣れた公園。今日だけはいつもより生き生きと見えた。

活気があるわけじゃない、公園自体が生きているように。

「でしょ？同じ場所なのに、季節で風景が違って見えて面白い……こういうこと将来勉強したいなあって、思ってるんだ。」

日高さんが大人に見えた。楽しんでるだけじゃなかった。もうちゃんと受験のことかも考えてた……。でも、そういうことを抜きにして考えると、こんな時間も悪くない。

ふと目線を落とすと腕時計が目に入った。

「結構話し込んだじゃった！帰らなきゃ。日高さんは大丈夫なの？」  
私は立ち上がって言った。

「私はもう少しいても平気だから。」

ふと、今まで日高さんが一人で公園にいたことを思い出した。この時間、何だか一人で楽しむのは惜しい気がした。

「また、時々一緒に見てもいい？」

少し緊張しながら聞いたが

「うん、歓迎。」

アツサリと、笑顔で返された。

その言葉に嬉しくなりながら、私は手をふった。

「じゃあ、またね。」

「うん。また。」

週に二回の楽しみ。

日々の楽しみが増えた私は足取り軽く家に向かった。将来のことも、日常のことも、楽しんで考えよう。ふと空を見上げると、先程より高い位置に月があった。

今月の満月はきつと綺麗に昇る。

そんな予感がした。

しかし日を追うごとに、月はかけていった。

満月は過ぎていたのだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8103x/>

---

息吹を感じて

2011年10月22日11時02分発行